

おしっこ小説 その1 僕がこの世界に目覚めたきっかけの事件をさらに詳しく紹介

登場人物

翔子(仮名)

僕の性癖が崩壊したとある事件の当事者。僕とは別の高校に通う。方面が一緒でよく話していた高校3年生。

望海(仮名)

僕。鉄道で旅をすることが大好きな高校2年生。

作品の読み方

「」セリフ

()心の声

例「あああ(いいい)」

この場合あああがセリフでいいいが心の声

はじめに

僕は高校時代、春日部にある私立高校に通っていました。そして僕の家は都内にあり、都内の家から学校的最寄り駅の春日部駅まで東武線の急行電車で向かっていました。そして今回の事件となる翔子ちゃんは東武線をさらに進んだところにある駅が最寄り駅の私立に通っており、僕が降りる春日部駅までよく話していました。毎日同じ列車で向かうので毎日のように会っていました。

事件前日

望海「翔子ちゃん、おはよう。」

翔子「望海さん、おはよう。」

その日もいつもの電車。

翔子「ねえ聞いてよ、昨日誕生日を迎えて二十歳になったお兄ちゃんがはじめてお酒を飲んだんだけど、酔っ払って私に絡んできたのよ。」

望海「おう、でも兄妹仲良くて良いじゃないか。」

翔子「そうだけど……。」

望海「もしも僕が二十歳になったら一緒に飲もうよ。」

翔子「え！？まあいいけど。」

その日も僕と翔子ちゃんはたわいもない会話をしていた

「ご乗車ありがとうございました。まもなく、春日部、春日部です。東武アーバンパークライン、岩槻・大宮方面、野田市・柏方面はお乗り換えです。」

望海「お、降りなくちゃ。」

翔子「じゃあまた明日話そうね。」

望海「うん。翔子ちゃん。」

その日の僕はまさか次の日に性癖が崩壊するとは夢にも思っていなかったのである。

翌日(事件当日)

プシューウウウ

翔子「おはよう。」

望海「おはよう。」

翔子「もうすぐ試験だけど勉強できてる？」

望海「もうそんな時期か。全然してないな。」

翔子「ダメじゃない。」

望海「そうだね。」

この時、僕は翔子ちゃんに思いを寄せていました。学校に向かう電車で話すだけ。そんな関係なのにです。それもそのはず、翔子ちゃんはめちゃくちゃ可愛いんです。「モデルになったら売れるよ、絶対に！！」といつも思うほどでした。そんなことはさておき、列車は北千住駅を発車して、複々線区間に突入、埼玉エリアの学校に通う学生さんや支店に通うサラリーマンで少しばかりの立客がいるいつも通りの混雑具合でした。そして列車が草加駅に到着。

「当駅で特急列車を待ちます。」

いつも通り特急列車を待ち出発、そして草加駅出てしばらくしたころ……。

キキイイイ

翔子「え！？」

望海「なんだ！？」

「ただいま、この先を走る特急列車が人身事故を起こしました。運転再開までしばらくお待ちください。なお、運転再開にはかなりの時間がかかる見込みです。」

望海「はぁ……。こんなことになるなんて、もっと早く出ればよかったね。」

翔子「しょうがないじゃない……。もう……。」

この時翔子ちゃんは何かを我慢しているようだった。

望海(何だ、大丈夫かな……。)

お試し版はここまで。